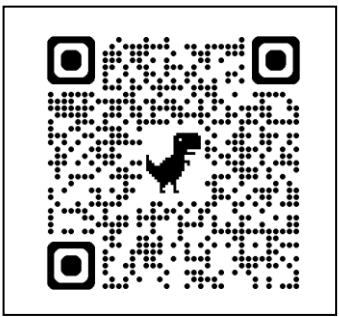




Jason Ginsburg (京都大学人間・環境学研究科総合人間学部) ・寺田寛 (大阪教育大学英語教育部門)
日本英文学会第98回大会 (2026年5月16日) @同志社大学今出川キャンパス

京都大学のジェイソン・ギンズバーグと大阪教育大学の寺田寛が2026年5月16日に日本英文学会で発表した内容の要旨を以下にまとめます。

この発表は、主に英語の関係節がどのような構造をもち、どのような仮定を経て派生されるのかについて、最近の生成文法理論の極小主義プログラムの枠組みで説明するものです。

1. 極小主義仮説

最新の極小主義理論は、最低限の原理に基づいて言語事実を説明しようとする立場から次の主な提案を取り入れています。

- (1) 強い極小主義命題 (Strong Minimalist Thesis) (Chomsky など) : 言語外の体系から求められる条件を言語は最適の形で満たせるように言語はできているとする主張 (“language keeps to the simplest recursive operation, Merge, and is perfectly designed to satisfy interface conditions” (Chomsky 2010:52))

2. 関係節の派生

関係節の派生および構造について、これまで代表的な分析が3つ提案されてきました。

- (2) a. 移動分析(Movement Analysis) : 関係節の外にある先行詞に対応する関係代名詞が関係節内の先頭の位置へ移動 (Chomsky 1977 ほか)
b. 一致分析(Matching Analysis): 関係節の外にある先行詞に対応する要素が関係節内部で移動し削除される(Chomsky 1965 ほか)
c. 繰り上げ分析(Promotion Analysis) : 関係節内から関係節の外へ主要部が繰り上げられる(Schachter 1973, Kayne 1994 ほか).

Kayne 1994の繰り上げ分析によれば、関係節を伴う名詞句(3a)は(3b(i)-(iii))の派生を受けるとされます。

- (3) a. the book which John read
b. (i) [_{CP} [which book] [_{IP} John read [which book]]] →
(ii) [_{CP} [_{DP} [book] which book] [_{IP} John read [which book]]] →
(iii) [_{DP} the [_{CP} [[book] which book] [_{IP} John read ...]]]

このように、関係節内に生起するwhich bookが関係節CPの指定部へ移動します。移動したDPの内部でbookだけがwhichの指定部へ移動します。このCPは決定詞theによって選択されています。

Kayneの分析は、決定詞theが関係節CPを補部として選択するという仮定やそもそも名詞句はAbney (1986)のDP分析でとらえるとする考え方に依存しています。この研究では、DP分析によらない関係節の派生を提案することになります。

3. 本研究の理論的仮説

下記のラベリング理論とコピー形成操作を採用します。

- (4) ラベリング理論 (Labeling Algorithm) (Chomsky 2013, 2015)

- {X,YP} 構造では X がラベルとなる
- {XP,YP} 構造には共有素性によりラベルが付される
- {XP,YP} 構造には XP がコピーの場合、ラベルが YP のラベルになる

- (5) コピー形成操作 (FormCopy) (Chomsky 2021)

- XP と YP は同一の形を持ち、かつ同一指示的であり、さらに XP が YP を C 統御している場合に、YP は XP のコピーとして解釈される。
- さらにここでは(6)-(8)の仮定を設けます。

- (6) 決定詞 the は独立した語彙ではなく、名詞の素性である(Fong & Oishi 2025)。
(7) 関係節内で、関係節の主要部と同一の形を持つ名詞句は、コピー形成操作の適用により、コピーとして解釈される。
(8) (標準英語では) 関係節は C_{rel}を主要部とする CP であり、その補文標識 C_{rel}が関係節の主要部名詞句との[±human]に関する一致により which、that、who、または無音の∅として外在化される。

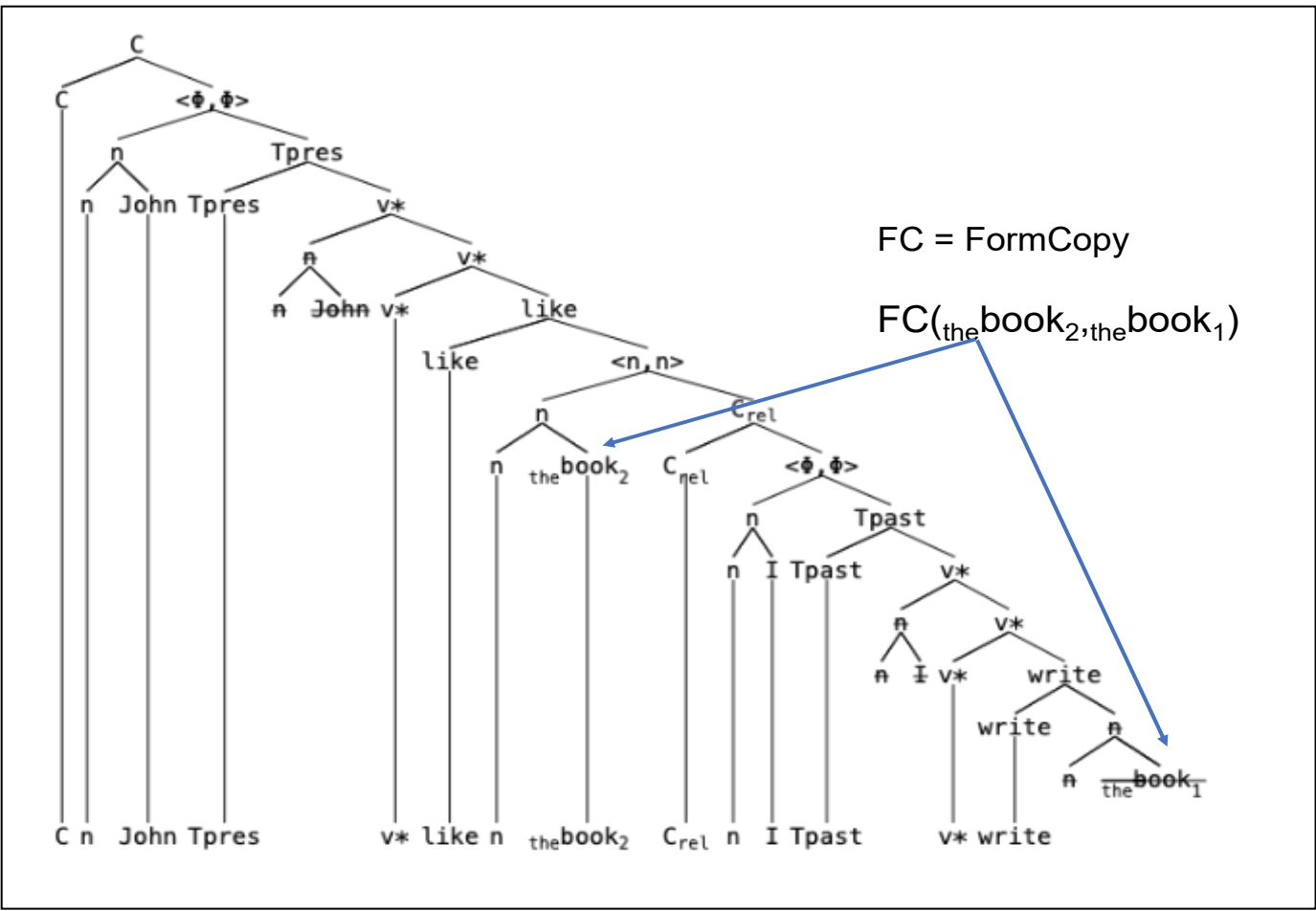
(6)を仮定する場合、繰り上げ分析には問題が生じます。それは、同じ項に二重に主題役割が与えられるという問題です。なぜなら決定詞には、関係節の内部から外部へ出ていく名詞句の素性としての位置づけしかなく、主題役割を受けるのは名詞句であるはずだからです。また、繰り上げられた名詞句は関係節内にとどまるとしても、付加部であるはずの関係節が主題役割を付与されることは問題であると思われます。それに対し、(7)のコピー形成を採用すれば、繰り上げ分析は不要になります。

4. 関係節の派生

(9)の関係節の派生を次の(10)のように捉えることにします。

- (9) John likes the book (that) I wrote.

(10)



主節のthe bookと関係節内のthe bookはそれぞれに動詞から主題役割を付与されます。これらの名詞句はコピー形成を受けます。但し、フェイズはコピー形成を阻止しません(Ginsburg 2026の仮定による)。ここでも、決定詞theは名詞bookの素性に過ぎません。関係節内部のthe bookは先行詞のコピーとして解釈され、発音されません。

関係節の先行詞nPの主要部 n には解釈可能な[-human]という素性が含まれ、関係節を導く補文標識C_{rel}は、この n の素性と Agree を結びます。主節の n がもつ[-human]素性と関係節内の補文標識C_{rel}が一致を結んだ結果、外在化(Exter-nalization)において、この[-human]素性がthatあるいはwhichあるいはゼロ形態素として発音されます。ここでの分析では、関係代名詞whichあるいはwhoが補文標識の位置で発音されることに注意してください。

5. 関係代名詞の外在化に課せられる要件

二重詰めCompフィルター(11)として記述される現象があります。

- (11) The Doubly-Filled Comp Filter

*[α β], if α is in SpecCP and β in the C-Position of the same CP, and α and β are overt. (Bayer (2015: 8))

それは一般にwhich/whoとthatは共起できないという現象です。

- (12) John likes the book that/which/∅ I wrote the book.

- (13) *Mary likes the book **which that** I wrote.

- (14) *She knows the boy **who that** called Mary.

(10)の派生では、wh語はSpecCPではなくC主要部を占めます。そこで(11)を(15)として捉え直すことにしましょう(Bayer & Brandner 2008)。

- (15) *[α β], if both α and β are the same head

一方、wh語から成る複雑な句は、thatと共起可能です。

- (16) Mary likes the book [only a part of **which ∅/?that** I wrote]

- (17) We’ve taken **what measures that** we can. (Radford 2018: 146)

- (18) As Liverpool chase the game, there may be more room [**in which for Manchester United to manoeuvre**] (Commentator, Sky Sports TV) (ibid.)

ゆえに、次のような外在化条件が成り立つと考えられます。

- (19) 外在化における重量要件 (Heaviness Requirement on Externalization)
wh句はその重量が大きい場合にはSpecCPで外在化されうる。

つまり、wh語はSpecCPにはないため、(13)-(14)は(15)により排除されます。これに対し、wh語を含む複雑な句がこれを回避できるのは、(19)によりSpecCPに現れることができるためであると分析します。

6. 結論

コピー操作に基づく本稿の一致分析は、繰り上げ分析に取って代わるものであり、極小主義仮説に沿うものです。関係代名詞wh語は補文標識の位置で外在化を受けることを提案しました。

主要参考文献 : Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press. / Chomsky, Noam. 2021. Minimalism: Where are we now, and where can we hope to go. / Chomsky, Noam. 2024. The Miracle Creed and SMT. / Fong, Sandiway & Oishi, Masayuki. 2025. On the nature of FormSet. *Linguistic Variation*. Advance online publication. / Ginsburg, Jason. 2026. Expletive constructions and agreement in Labeling Theory. *Studia Linguistica* 80 (1): e70006. / Kayne, Richard. 1994. *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.